(3) 感染症検査担当

調査研究名	研究の概要
札幌市における感染症の流行特性（咽頭結膜熱、水痘、手足口病） 研究担当者：扇谷陽子 研究期間：平成 23～25 年度	【目的】 感染症の流行状況は、地域によって大きく異なる。このため、国全体に加え、地域の感染症の流行特性を把握しておくことは、感染症の流行予防とまん延防止のために重要である。そこで、札幌市における感染症の流行特性を把握し、今後の流行時の情報提供に活用することを目的として、札幌市における咽頭結膜熱、水痘および手足口病の流行状況について調査した。 【方法】 対象は、感染症発生動向調査において 1999 年 4 月(第 13 週)～2012 年 12 月(第 52 週)の期間に、札幌市の小児科定点医療機関から咽頭結膜熱患者として報告のあった 13,071 名、水痘患者として報告のあった 46,769 名、手足口病患者として報告のあった 19,842 名とした。患者情報は、厚生労働省の「感染症サーベイランスシステム」より入手した。 【結果】 1.咽頭結膜熱 週毎の定点あたりの患者報告数について、1999 年第 13 週～2003 年第 48 週は、報告数が少ない期間が継続した。これ以降は、夏季(6～8 月頃)または冬季(10～1 月頃)に患者報告数が増加する年が認められるようになった。年齢別患者報告割合について、例年 1～5 歳がそれぞれ 10%以上と高かった。最も報告割合の高い年齢は、1999 年～2006 年および 2008 年は 3 歳または 4 歳であったが、2007 年および 2009～2012 年は 1 歳であった。 2.水痘 週毎の定点あたりの患者報告数について、例年 5～7 月頃と 12～1 月頃に増加し、8～10 月頃に減少する傾向であった。 年齢別患者報告割合について、各年の各年齢の報告割合に大きな変動は認められず、1～4 歳の各年齢が 14～20%の範囲にあり、それぞれ高かった。 3.手足口病 週毎の定点あたりの患者報告数について、主に夏季を中心に 6 月中旬～11 月中旬にかけて増加する傾向にあり、増加の程度は年毎に異なっていた。 年齢別患者報告割合について、1～2 歳と 3～5 歳までの患者報告が、それぞれ報告の約 40%と高かった。最も報告割合の高い年齢は、多くの年で 1 歳であった。 【考察】 今回の調査の結果、それぞれの疾患について、流行する季節、報告数及び患者年齢の傾向が判った。今後は、今回の調査の結果を活用し、それぞれの疾患の特性に応じた感染予防の注意喚起を行いたいと考えている。